

古河歴史見聞録

奥原晴翠

～奥原晴湖の弟子そして養女として～

男装の女性南画家として知られ、生涯を独身で通した古河出身の奥原晴湖。彼女の弟子の一人に、奥原の姓を継いだ女性がいまいた。今回は、晴湖の弟子であり養女でもあった奥原晴翠について紹介します。

晴翠は名をてるといい、嘉永5年4月2日、岩代国(福島県)半田銀山に、幕吏であった小杉榮太郎の次女として生まれました。公武合体論に強い影響を受けた榮太郎は京都へ出奔、半田に残された晴翠母子は、路頭に迷う身の上となります。行方知れずの父を探すため、晴翠と母は京都に赴き探し歩くもその消息は知れず、その後、江戸・御徒町に住む晴翠の伯父の元へ身を寄せたのでした。

晴湖の弟子・養女となる

慶応2年、15歳の晴翠は、母を養うため画の道で身を立ようとして、下谷の摩利支天横町に住む晴湖の門を叩きます。事情を聞いた晴湖は、晴翠の入門を許しました。日々進歩する晴翠の画技への期待



▲明治3年頃の奥原晴湖(左)と晴翠(右)

や、追い詰められた家庭の事情を鑑みて、晴湖は晴翠の母と相談し、明治元年、晴翠が17歳の時に自分の養女として迎えます。明治3年には、生涯を晴湖に付き従い忠実な弟子となる渡邊晴嵐が入門。晴嵐は晴湖の画風をよく会得して、小晴湖ともいえる画業を残し、またその器用さから、家政も担える存在でした。一方、晴翠も長年の薫陶を受け、画風は晴湖風でしたが、徐々に独自の芸術を生み出すことに努めるようになります。

さて、同24年、南画界の衰退と摩利支天横町の画室が鉄道敷設用地として買い上げられたことを機に、晴湖は現在の埼玉県熊谷市に隠棲。晴翠は晴嵐と異なり家政に疎く、師の力にならないことを詫

びて、このまま都会で諸大家に接し修行を続けることを晴湖に請います。晴湖は晴翠の決意を認め、東京に残ることを許したのでした。旅をして画境を開く

とはいえ、中央画壇での南画は、依然として衰退した状況であり、晴翠の生活は苦難に満ちたものになります。外国人相手の仕事を求めて、同門の永峰松濤と横浜に行くも思うようにいかず、写真の彩色の手内職をして暮らしますが、やがて自分自身の芸術を創造するため、諸国漫遊を思い立ちます。路銀と生活費を揮毫して得ながら、北海道や奥羽地方を巡り、実景に接して見聞を広めます。構想を練って自らの画風を確立していきます、再び東京に帰ったのは同28年11月のことでした。下谷仲御徒町に家を借りて墨場とし、長い旅で得た画境と画技の研鑽によって描いた作品を、翌29年の日本美術協会に出品。この作品が評価され特賞を受賞します。ちなみに、日本美術協会は伝統絵画による美術

団体で、宮内省と深い関係がありました。本作品は御用品として皇室に買い上げられ、晴翠の名声は一気に高まる結果となりました。

中央画壇での成功

以降、晴翠の作品は、毎年皇室の御用品として買い上げられるようになります。照憲皇太后や大正天皇の御前で揮毫することも多く、さらに国寶の来朝があるたびに、御前揮毫を行っています。展覧会等にも出品し、大正元年の第6回文展では双幅の作品が入選、晴翠に入門する者も増えて、南画家として一家を成したのでした。画家となって母を養うために晴湖の弟子となり、後に養女にもなった晴翠でしたが、晴湖の元を離れ東京に残り、その画風から一歩踏み出し独自の画風を確立したことが、画壇での成功につながったといえるでしょう。苦難を経ながらも華々しい成功を収めた晴翠は、大正10年9月1日、70歳の生涯を終えたのでした。

古河歴史博物館学芸員 倉井直子

【一般書/小説】 鹿鳴館の花は散らず 植松三十里 著

公家の娘として生まれ、若くして夫と死別した榮子は、侯爵、外交官の鍋島直大と再婚するが…。『鹿鳴館の花』と讃えられながらも幾多の困難を乗り越え、看護の現場に参加し、赤十字活動を支えた貴婦人の気高い生涯を描く。
出版社…PHP研究所

【絵本】 なでなでにっこり！ 新井洋行 作

ペンギンちゃんは、なでなでするのがだいすき！ 弟やねこちゃん、アシカくん、きりんさんの頭をなでなで。みんな、にっこり。ところが、ペンギンちゃんが転んでしまい…。親子でスキンシップできる、あかちゃん絵本。
出版社…童心社

【一般書/随筆】 家から5分の旅館に泊まる スズキナオ 著

行き先は何も遠い地に限らない。近所の旅館やビジネスホテルにも、知らない世界が広がっている。元気がないときこそどこかへ行きたくなる著者の旅の歩みをつづる。
出版社…太田出版

【児童書/読み物】 みおちゃんも猫好きだよ？ 神戸遥真 作

とてもかわいい転校生のみおちゃんは、猫アレルギーがあることを秘密にしていた。ところが、猫のいる雑貨店で、みおちゃんの誕生日会を開く計画が勝手に進んでしまい…。見えない病気や困難と配慮を考えるきっかけとなる1冊。
出版社…金の星社

図書館の本棚から



古河図書館

ファインダー越しの昭和時代 Time Travel Photographer

古河競馬場のパドック 昭和31年



古河第一中学校の近くには、かつて競馬場があり、一獲千金を夢見る人たちにぎわっていました。廃止後の広大な跡地には、保健所・税務署・小学校・住宅団地などが建ちました。

古河市在住写真家
鈴木路雄さん

